反天皇制運動
Alert
21号
［通巻403号］
2018年
3月6日発行
第Ⅹ期・反天皇制運動連絡会

今月のAlert
◉眞子婚約延期問題に露出する家父長制社会
——天皇の沖縄・与那国訪問に反対する行動へ——＊2
反天ジャーナル◉——よこやまみちふみ、宮下守、映女＊3
状況批評◉「昭和Xデー」反対闘争探訪記—三〇年間の距離——松井隆志＊4
映評◉映画『月夜釜合戦』軽薄な導入（佐藤零郎監督）——平井玄＊7
ネットワーク◉「新元号制定に反対する署名」にご協力を！——村上らっぱ＊8
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈94〉
◉戦争を放棄したのだから死刑も……という戦後初期の雰囲気——太田昌国＊9
マスコミじかけの天皇制〈20〉
◉〈世襲の超特権的奴隷制〉一族の娘の結婚トラブルをめぐって——〈壊憲天皇明仁〉その18
——天野恵一＊10
野次馬日誌＊11　集会の真相＊13　学習会報告＊15
反天日誌＊15　集会情報＊16

2/8～11、反五輪の会＆おことわリンクの4人で平昌五輪反対国際連帯ツアー。昨年来日したスポーツ平和研究所イ・ギョンリョルさんが全行程コーディネート、熱くて（超寒かったけど）濃密な4日間になった。

初日はソウル·光化門広場で街宣、夜は韓日国際フォーラムに参加した。平昌オリンピック反対連帯キム・ミンスの報告「予定された失敗された五輪の災害は必要ない」はもろ私たちの主張と重なる。翌日は江陵へ。市民メディアセンターでインタビューを受け、夜は平昌・開会式会場前で1時間抗議のパフォーマンス。3日めは江陵の市民グループ主催「ごめんねデモ」に参加、オリンピックパーク近くの丘までデモ。山・自然を破壊して、五輪を止められなくてごめんねと、白い布を被った幽霊たちと歩いた。最終日は寒風吹きすさむ旌善アルペンセンターで反対集会に参加し「カリワンサン、サヨ～ナラ～（蘇れ!）」とコール。通訳のOさんのおかげで韓国の仲間たちとの交流も充実したものになった。感謝！

平昌を招致したパク・クネは倒れ、盟友チェ・スンシルの疑惑の中に五輪もある。ギョンリョルさんが求めていた南北共同チームは実現したが、五輪の問題はそのままで、ムン政権誕生の今、逆に批判し難い空気が生まれている。反対するのは主に太極旗を掲げた右翼の人々。韓国内では一般的に冷めている五輪の最中、安倍政権の発言の異様さは際立つし、日本政府の態度が朝鮮総連本部への右翼テロ等にも繋がっていくのだと思う。韓国の仲間たちと共に「NOlimpics Anywhere」を掲げ、コールした意味は大きい。リオの「反五輪トーチ」も平昌に登場、東京にも繋げたい。2020年どのような国際連帯運動を創り出せるか、大きな宿題を背負った。（密の眠り）

250円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://hanten-2.blogspot.jp/　mail: hanten@ten-no.net

今月の Alert

眞子婚約延期問題に露出する家父長制社会―天皇の沖縄・与那国訪問に反対する行動へ

啓蟄。寒い冬を土の中で越した虫や蛙や蛇などの生き物が、春になって穴から出てくる様子を表す季語。Alert 21号の発行日三月六日は二〇一八年のその日にあたるという。

気分は春。命短し恋せよ乙女よろしく恋の季節の真っただ中、秋篠宮家の長女眞子。昨年五月NHKに「婚約内定」がスクープされ、九月に婚約が内定し二人そろって記者会見。三月四日に「納采の儀」で正式婚約し、十一月四日に帝国ホテルで結婚式を挙げる予定だった。ところが、二月六日に宮内庁は異例の結婚延期を発表した。『週刊女性』『週刊文春』『週刊新潮』が続けて結婚相手の母親の金銭トラブルを報じた。新潮にいたっては援助交際などと過激な言葉を使用している。

どの紙面も、蛙や蛇がゲロゲロ、チョロチョロと赤い舌をだしながら這い出してくるような、しかしそこに春の訪れなど微塵も感じさせない、魑魅魍魎が跋扈する気持ちの悪い天皇制の持つ差別的世界が広がっている。

資産のない母子家庭。父親が自殺。母親はパート。学資を借金するが返済なし（母親の婚約者が肩代わりしたが、婚約解消後に返済を求む）。貧乏なのにインターナショナルスクールに通わせ上昇志向あり等々、それらは蔑まれる対象として何の疑問もなく記されている。そしてこのような人物は、皇族のましてや未来の天皇の義兄としてふさわしくないという論調だ。

品位や品格という言葉が飛び交い、それを体現するものは天皇や皇族、資産家であり、蔑すみの対極として存在する。

女性皇族が結婚のために皇室を離脱する時に、国より「元皇族としての品位を保つため」という名目で一時金が支払われる。品位や品格とはそもそも何ぞやという声も聞こえてきそうではあるが、貧乏な人間にはそれが無い、つまり下品だということになるのだろうか。一億数千万円の税金が使われる名目の差別性を問題にしなくていいのだろうか。

経済的に苦しい家庭の子どもを支援する公益財団法人の調査結果で、経済的な理由でさまざまな経験を諦め、貧困家庭の七割が塾や習い事を断念しているということが分かった。改善してほしい支援については「給付型奨学金や授業料免除など教育や進学の負担を減らしてほしい」が約八〇％と最も多かったという。保護者の切実な思いである。卒業しても奨学金を返済するために貧困から抜け出せないという話を身近でも聞く。

問題にすべきはこのような教育の格差を生み出す政治であろう。朝鮮学校の「高校無償化」からの排除もまた、この社会の差別性を浮き彫りにする。

今回の金銭スキャンダルはまさにこうした問題が端を発している。

宮内庁は結婚延期は母親の借金スキャンダルではないと否定する。「納采の儀」を直前に控えた、集中砲撃ともいえる凄まじい悪意に満ちた報道である。この結婚を阻止したい勢力の蠢きととらえるのは思いすごしだろうか。

週刊誌報道の信憑性がどれほどのものかさだかではないが、宮内庁関係者のコメントとして掲載されている部分を紹介する。

「婚約内定会見を開くにあたって、陛下から結婚の『裁可』をいただいています。破談となれば陛下の〝意志〟を覆すことになりますから、白紙に戻すというのは現実的には難しい」（『女性セブン』18.2.15号）

憲法二四条は、「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し～」と規定している。先ずここで問題にしたいのは、家父長制が廃止されているにも関わらず、天皇の許可が必要であるかのごとく記載されていることである。民法においても、皇室典範においても結婚に天皇の許可が必要などということはどこにも規定されていないのである。そして次に指摘したいのは、「裁可」という言葉使いである。これは明治憲法下で、天皇が議会の議決した法律案・予算案を承認する行為をさす。それが象徴天皇制になった現在においてもなお平然と使用されている。天皇の権威の連続性はスキャンダラスな週刊誌報道においてさえ継続しているのだ。

政府は二月二十日、式典準備委員会の第二回会合を開き、最後の「おことば」を述べる「退位礼正殿の儀」を国事行為として、二〇一九年四月三十日に行うことを決めた。退位と即位に伴う式典の準備は着々と進んでいる。

そのようななか、アキヒト天皇は三月二七日～二九日にかけて沖縄・与那国を訪問するが、沖縄入りする二七日は、琉球国王に城の明け渡しを求め廃藩置県を布告した日である。反天連も参加する4・28―29連続行動実行委員会は、三月二四日に「天皇の沖縄・与那国訪問を問う」集会を行う。天皇制攻撃の拡大を、反撃の拡大で迎えよう。積極的に参加を！

（鰐沢桃子）

『原発切抜帖』を観る

福島第一原子力発電所の事故から七年が経とうとしている。この間、夥しい数の原発関連書籍や資料が刊行されてきた。しかし、それ以前にも参照すべき重要な文献資料がある。その中のひとつが、土本典昭によるドキュメンタリー映画『原発切抜帖』（一九八二年）である。『原発切抜帖』は、『水俣?患者さんとその世界』（一九七一年）をはじめとして水俣病問題に取り組み続けた記録映像作家だった土本が、原発問題を主題化した作品である。

本作は、人物や風景ではなく、原子力関連の新聞記事の切り抜きと、それに対するナレーションで構成され、新聞という媒体における原子力の表象をつぶさに炙り出していく作風である。物語は、原爆を「焼夷弾爆弾」としていた投下翌日の小さな記事と、仁科芳雄による「ウラン原子核の分裂」という敗戦翌日の大きな記事の対比から始まる。他にも、原子力時代の到来を喧伝する「電気料二千分の一に」や「ロケットで大陸旅行」の記事は、それがまったく現実化することのない、まさに「夢の原子力」であるという意味で印象的である。

国内外の原子力問題（事故多発と隠蔽体質）を新聞記事から明らかにすることを通して、福島の事故が決して歴史的な特異点ではないことを、改めて教えてくれる。

（よこやまみちふみ）

ないのに報道ってイメージ操作？

松本文明内閣府副大臣が二〇一八年一月二五日衆院本会議で、日本共産党の志位和夫氏が沖縄米軍基地問題に関し米軍機ヘリ不時着問題などを代表質問した際、「それで何人死んだんだ」と議員席からヤジを飛ばし、二六日に辞職届を提出、二九日の持ち回り閣議で辞職が認められた。

安倍首相に辞職届提出後の一月二六日記者会見で「不規則発言で、人が亡くならなければいいのかというような誤解を招いた」、「沖縄県民、国民の皆さんに迷惑をかけた」旨の発言をしたと報道された。

その文言が辞職届に反映されているか内閣官房に情報公開して確認した。

【私儀このたび都合により辞職いたしたくお願い申し上げます。】書かれていた文書はこれだけである。日付は数字が書き込まれておらず辞職届だけでは提出日が一月二六日かすら確認出来ない代物。それでどうしてさっきみたいなことを書けるのか。

そもそもしんぶん赤旗以外は松本氏の発言を一月二六日付で報道していない。民進党の大塚耕平代表が民主党と言い間違えたことは報道したくせに。マスコミ記者の皆さん。ウオッチドックなど偉そうなことを言うのなら少しは辞職届などの現物にあたった上で、報道して下さいね。（宮下守）

「家制度」復活！民法改正

現在、国会に民法改正案が提出されています。週刊誌などでは相続法の改正が話題になっています。

ところが、この改正案には重大な問題があります。それは大戦後廃止されたとされている「家制度」の復活にほかならないということ。

家族法の二宮周平・立命館大学教授の解説（「週刊金曜日」18・2・16）によると、今回の民法改正は、二〇一三年に民法の婚外子相続差別規定が違憲とされた最高裁判断がきっかけ。この判決が法律婚を揺るがすものとして危機感を抱いた自民党が法律婚保護を優先させる相続法の改正をはかりました。当初、配偶者の取り分を増やそうとしたものの挫折。配偶者の居住権確保と婚姻期間の長い場合（二〇年?）、配偶者が生前贈与や遺言で譲り受けた土地・建物は原則として遺産相続分割の計算対象とみなさないようにする形としました。さらに、相続人以外でも夫やその親の介護をした人に要件を満たせば金銭要求が認められるようにしました。親族のみで内縁関係者は排除。

「嫁」の座強化です。結婚すると九六％が男性の姓を名乗ります。加えて性別役割分業という社会制度に支えられた戦後の「家制度」。夫やその親の介護を「嫁」に行わせようと相続という「アメ」を与えます。夫婦別姓の動きへのバックラッシュ？

（映女）

反天ジャーナル

状況批評
思想・状況・批評

「昭和Xデー」反対闘争探訪記——三〇年間の距離

松井隆志（戦後研究会）

日頃使わないのでピンとこないが、今年は「平成三〇年」なのだそうだ。つまり「昭和Xデー」から三〇年目ということになる。本稿は、過去の「代替り」とそれへの反対闘争、すなわち三〇年前を振りかえって、現在との違いを考えてみたい。ただし、意気込んだテーマの割に、素描に過ぎない点はお許しいただきたい。

当時私はまだ子どもだったから、体験的に論じるわけにはいかない。そこで書物に頼る。手元には、たとえば『「平成・非国民」宣言：実録（ドキュメント）・天皇「代替り」との闘い』（天皇制賛美はゴメンだ！「即位・大嘗祭」に反対する共同行動編・軌跡社）という本がある（一九九一年刊）。編者名にあるとおり、一九九〇年の「即位の礼・大嘗祭」反対闘争の記録で、一連の反「Xデー」闘争の後半にあたる。本書を読むと、第一に、わだつみ会をはじめ、ヒロヒトの戦争責任を問題にしていることが目に入る。当時、敗戦からわずか（?）四〇数年だった。その名において膨大な人々が殺し殺されたにもかかわらず、何の責任もとらないまま死んだヒロヒト。そして、素知らぬ顔で（むしろ盗人猛々しく）平和と民主主義の看板で引き継がれる象徴天皇制。それらへの怒りが、当然のように反対運動の底流にあったと言えよう。

そして第二に、そうした歴史偽造の大宣伝を担ったマスメディアの翼賛ぶりや、特にヒロヒト死去までの「自粛」強制が、広範な人々に危機感、少なくとも素朴な違和感・反発を生み出していた。本書の時期は、「自粛」というよりむしろ「祝賀」強制が問題になっているが、他の様々な証言からも明らかな通り、予想外に長引き異様な強制力を発揮した「自粛」が、「昭和Xデー」反対闘争の一つの原動力になった。

三〇年前は、反対闘争の前提に、こうした社会意識が存在した。では、現在はどうか。

反天連もさんざん批判してきたことだが、いまやアキヒト天皇制は「平和・護憲」勢力としての認定すら得ようとしている。もちろん、一部の人々の中でではあるが、その「一部」は案外大きい。仮にそこまでひどい「誤認」はなくても、確かにアキヒト自身は、直接的に戦争指導をしてきたわけではない。アキヒト天皇制や次の「代替り」に対して、戦争責任（植民地支配責任や戦後責任も含めて）を問う声は、広がっていない。まずここが違う。

二点目も大きく異なる。というより、三〇年前の「失敗」を繰り返さないための策略が、巧みに展開されたのだと、残念ながら言えるだろう。どういうことか。「自粛」は、日本社会に目に見えて否定的な作用をもたらし、人々の反発を生みだすであろうことは、天皇制側にとっても課題だったはずだ。しかし、天皇にも寿命があることは否定できず、かといって「玉体」はできるだけ長期保存することも要請される。「人間なのに神聖」という天皇制が抱えるジレンマとも言える。予測しきれない死期とそれを先送る治療行為、そしてそのことの「国家イベント性」によって、「自粛」現象再発のリスクは避けられない。私はそう考えた。

このリスクを克服する妙手が、「生前退位」なるものだった。「代替り」はなされるが、そこで天皇は死なない。（仮に予期はできても）日時未確定の突発事項だったものが、計画的行事に入れ替わる。「Xデー」から、

不吉で不確定な要素がきれいに取り除かれる。だから「自粛」は生じず、弔事はすっかり慶事に置き換えられる。「自粛」による経済的打撃を恐れていた事態は、むしろ祝賀式典連発の景気振興策と化すかもしれない。強制は当然あるだろう。しかし、めでたいことだから祝うのは当然と、社会問題化を封じられる（オリンピックとともに！）。「元号」の書き換え、休日の移動、カレンダーや書類の作り替えも、あらかじめ準備する時間があるから、仮にブツブツ言ったとしても十分対応可能となる。アキヒト個人も当然どこかで寿命を迎えるが、平和と民主主義を愛した良い老人として、事前報道なく静かに死んでいくことができる（死後に讃美報道の洪水となろう）。「生前退位」は、マイナスをプラスに転化する絶妙な一手だったと言う他ない。

ここまでは、「Xデー」反対闘争の前提となる社会意識についてだった。今度は、運動主体について考えてみよう。

「昭和Xデー」が問題になった一九八〇年代後半は、既に消費社会化が飽和し（ちょうどバブル経済と重なる）、社会運動はとっくの昔に「ダサい」とされた後の時代だった。たまたま読んでいた一九七八年の文章で、東大生の支持政党調査で、自民党支持率が倍増する一方、共産党支持率が一桁下がったという話が紹介され、社会全体の「右傾化」が指摘されていた。そういえば日高六郎が、戦後の社会意識の変化を、「『滅私奉公』から『滅公奉私』へ」と表現したのもこの頃だった（『戦後思想を考える』岩波新書・一九八〇年）。だから「反対闘争」など、既にこの時代のメインストリームから大きく外れた出来事だった、とは言える。

しかし、「右傾化」も「滅公奉私」も、「当時の時点から過去と比べてそう見えた」という点に注意が必要だ。三〇年後の現在から眺めると、八〇年代はなお、活気ある反対闘争が続いていた時代だったように見える。最初に触れた『「平成・非国民」宣言』の表紙には、「マス・メディアに無視された史上空前の大衆運動の全記録」とある。天皇制と対決した大衆運動として「史上空前」であったことはその通りだろうが、単純に量の問題としても、今から見ると「空前」の規模に思える。

そもそも、八〇年代は社会運動にとってそんなに不毛な時代だったのだろうか。今ここで具体的な検証はしないが、七二年の連合赤軍事件で「左翼」はとどめを刺された、というイメージが強く存在してきたように思われる（私もそういうイメージを共有していた）。確かに、大学闘争は鎮圧され、警察の弾圧と内ゲバの中で、七〇年代以降退潮を強いられる、という歴史像は、それなりの根拠がある。しかしそれは、いわば「学生運動」に強く引っ張られた語りなのではないかと、運動史を辿ることで最近考えなおすようになった。むしろ七〇・八〇年代こそ、六〇年代の体験者たちが社会のあちこちに広がり、あるいはその空気を吸った後続世代が新規参入して、自立した諸運動が豊かに作り出されていった時代なのではないか、とすら思うようになった。この「マス・メディアに無視された史上空前の大衆運動」の他に、たとえば、チェルノブイリ原発事故を契機とした反原発運動もその一例として挙げられるだろう（その運動的評価は別としても）。

この仮説の先で、では「なぜ八〇年代は社会運動の時代として語られないのか」が問題になるが、自立した運動のネットワークや特に自前のミニコミの充実が、マスメディア（マス・ジャーナリズム）との断絶に掉さす結果となった、ようにも思われる。ただし、このあたりの話は、今のところ憶測の域を出ない。

話を戻すと、少なくとも確実に言える単純な事実として、いわゆる「全共闘世代」がまだ若かったということがある。「Xデー」時点で、かれらは四〇歳になるかならないかの年齢だった（！）。当時の自意識として既に若くないつもりだったかもしれないが、今から見れば、大学闘争から二〇年に満たない時間しか経っていなかった。天野恵一は、『「平成・非国民」宣言』の座談会や原稿の中で、自分とその同世代にとって「昭和Xデー」反対闘争が、「内ゲバとテロを作り出して来てしまった世代」の「反省と自責」の運動だった点を、随所で強調している。そこで言わ

んとする運動の質についての検討は、残念ながら本稿は果たせないが、その後の運動現場でのキャリアも重ねた世代が、活発に、かつ一定の量として存在していたことは、この時代の社会運動の基盤を形成していたように思われる。

また、同書に収録されている「キャラバン」の記録を追っても明らかな通り、「中央」で大きな政治運動があってそこに活動家が集っている、というのではなく、全国各地に労組・大学関係やその他様々な小集団が存在し、かれらが各地の抗議主体となっていた（「キャラバン」の場合には受け皿になった）ことが見て取れる。一つ一つの集団の成り立ちを辿ったわけではないが、それらは、六〇年代に蒔かれた種が、七〇年代以降あちこちで勝手に育っていったものだと想像しても、大きく外れていないのではないか。いずれにせよ、しぶとく続けている人々が各地にいるであろう一方で、三〇年の時間を超えて、たとえば現在「キャラバン」は再現可能なのか、と思う。

以上、現在の地点からざっと三〇年前を眺めてみた。それを踏まえて、現在について最後に何か言わなければなるまい。たぶん悲観的な診断ならば簡単に書けそうだ。特効薬の処方箋もない。とはいえ、何の展望もないわけではないだろう。運動主体の問題は重要だが、社会運動一般の問題でもあるため、別の機会に考えるとして、ここでは、象徴天皇制側にとっても時間の経過は楽観できないだろう点を述べたい。

象徴天皇制を支える意識は、各種の装置を通じて確実に再生産されている。しかも、現在の安倍政権がことさら「復古反動的」に映るがゆえに、それへの反発がアキヒト天皇制に吸引されるという結果を生んでいる。だが、大日本帝国憲法体制下のような天皇制への断固とした支持は、現在の体制ではかなり難しい。「天皇制はどっちでもいいけど、何となくあった方が安心するよね」という支持調達のあり方は、やはり「本当にどっちでもいい」に接近しかねないと思われる。「あった方がいい」を固める手段は、必ずしも明示できていない。

また、支持の全般的希薄化状況の中で考えた時、皇太子と秋篠宮の関係（あるいはマサコかキコか）も思った以上に重要な影響を与えるかもしれない。これまでは、天皇の次は皇太子、その次はその息子、と皇太子一家にだけ注目していれば良かった。ところが今回は、対照的に見える兄弟夫婦が、並行して注目を浴びる時間に入る。そこでのマサコ派とキコ派の対立は、致命傷ではないにせよ、小さな亀裂があちこちに広がる、ということになるかもしれない。

これらは思いつきの指摘に過ぎないが、「昭和Xデー」反対闘争でも、「自粛」への反発や「わだつみ」世代の反天皇意識など、状況の中で生じた人々の意識を発見し、そこに接続しようという努力がなされていたことは、『「平成・非国民」宣言』からもうかがうことができる。三〇年後の「Xデー」には三〇年後なりの闘い方がある、という凡庸な結論で終わりたい。

映画

映画『月夜釜合戦』軽薄な導入（佐藤零郎監督）

平井玄

いきなりですが、映画の口上はこんな調子で始まる。

「♪♪寄ってらっしゃい観てらっしゃい！　ただただ難儀なこのご時世に、観ては益ナシ損もナシ！ふらりと立ち寄るもまた一興。手前取り出したるは大阪生まれの人情喜劇『月夜釜合戦』！　舞台はアベノハルカス、坂を下りて、行きつくところは釜ヶ崎～」。ヒモのチンピラに私娼たち、日雇いたちや芸人、子どもに活動家。泥棒までが盗まれた大釜もとめて大騒ぎ！――てなもんである。

つまり、佐藤零郎監督が放つ第二作目は「現代ドタバタ人情喜劇」なのである。

◆人情喜劇って何やねん？

釜ヶ崎だの、ジェントリフィケーションだのという前に、そういう眼が観る。だけどどうなんだ。毎日毎日起きることが、AI仕掛けのドタバタなのに、そんなものが成り立つのか？「人情の機微」なんてのはビッグデータが捕捉するマーケットの感情資源だぜ。テレビで芸人たちが演ってるのは「お笑い」じゃない。ただの同調圧力ショーでしょ、と思うだろう。

え？　思わないって。テレビでオリンピックを観てた人たちはそんなにヒネクレてないですか。う～んまあ、そこんとこはすっ飛ばそう。ここはヒネクレ者たちの溜まり場だ。

だから、まずこの映画と比べたくなるのは北野武の『アウトレイジ』である。『山谷 やられたらやりかえせ』ではない。北野三部作は希代のコメディアンが「人情もお笑いもヤクザもクソもあるか！」とぶちまけるからこそ、まあ魅せる。三作目は未見という前提でいおう。間違ってはいけない。「暴力もクソもあるか！」という写真なのである（映画屋さん風に）。

尾田栄一郎のコミック『ワンピース』から、北野の脳髄に溜まっていたのだろうゴダール『気狂いピエロ』やつげ忠男の貸本漫画まで、破断烈々の美学的冒険がぶちこまれる。ぶちこまれるほどに暴力はますます危うく抽象化される。意識か無意識か、北野の映像は九〇〇〇キロ先の沙漠で動くターゲットを瞬殺するドローン兵器に刃向かう。その苛立ちの先がドローンの眼が視るリアルなきリアリティなのは間違いない。そこで寸止めにしておこう。

◆実録かドタバタか

ということはだ。誰でもいうが『アウトレイジ』は深作欣二『仁義なき戦い』の系譜にある。ヤクザ映画だからではない。繁栄する一九七〇年代の裏側で進行する内ゲバ戦争。ブツを握った五本の指の間からこぼれ落ちる「暴力」のリアルへの渇き。渇いた喉を血で潤した果ての虚脱の眼がこちらを視ている。「実録」と謳っても、脂ぎった現実を透かすように抽象的な次元が浮かぶのである。今ならこういえる。『仁義～』は「暴力の無力さ」の映画なのだ。そう観よう。この系譜から生まれたもうひとつの作品が『山谷』である。と殺された山さんと佐藤さん（山岡強一・佐藤満夫監督）に、三〇年以上も過ぎて言うのを許してくれ。

同時に山田洋次がいる。彼は『仁義～』のパロディーのように『男はつらいよ』を創り続けた。柴又の放浪記は呉のラプソディーより三年先だが、観れば初期三作のトーンは暗く重く、それまでの東映任侠ものより『仁義～』に対応する。若造時代は酒場で寅さんを持ち上げる者たちを罵倒していた。がねえ、そうは簡単にはいかないよ。この三作には「常民とマレビト」なんぞという構図に収まる以前の源公（蛾次郎）を殴り倒す寅がいた。やるせないほどヒネクレた寅次郎の後ろ姿だ。喜劇こそが底深い抽象なのである。

とすれば、ドタバタな『月夜釜合戦』は実録映画『山谷』へのスラップスティックなアンサーなのか。「飛田遊廓取りしきる、釜足組の大事な大事なお釜の盃、流浪の芸人逸見にこっそり盗まれた。チンピラたちは大わらわ！それを観ていた源次郎！釜が売れるー！」「さあさあそれでは御開帳！開発迫る釜ヶ崎で釜をめぐるカマの掛け合い、はじまり～。はじまり～」。

釜って、いったい何なんだ？そいつの周りをグルグル回りながら、話の穴は掘られていく。若い私娼たちが全然まったく素っ気ない。乾いているからこそ艶っぽい。泥棒の子どもと彼女たちだけが釜騒ぎを醒めて見ている。こういう「実録とドタバタ」をめぐる長い系譜と対偶において現代人情喜劇『月夜釜合戦』を観ようなんて言ったら、若き佐藤零郎監督には迷惑かな。

七月には待望の東京公開が始まるらしい。ヒネクレ者なら一人残らず駆けつけない手はない。

ぬくとぬーく NETWORK

「新元号制定に反対する署名」にご協力を！

「元号」はいらない署名運動

村上らっぱ（天皇制いらないデモ実行委員会）

「次の元号は『屁、すな』がええ」

昨年の秋に実家の四国へ戻った時、弟とその友人達と話す機会があった。地域の祭りの打ち上げで酒も入った中、取りとめもない話題として出たのが元号についてだった。二〇一六年八月八日の「おことば」から一年が経ち、愛媛国体で明仁・美智子がやって来てそう経ってない時期。天皇を身近に感じ、普段は意識しない元号も酒の肴にはなるという事か。「次はどうなるか」というお題に弟が答えたのが冒頭の言葉だった。きょとんとする周りに曰く「『平成』は『屁、せえ（屁をしろ）』という事で屁ばっかり出していた。もう屁は充分出したから次は「屁、すな（屁をするな）」が良い」との事。元号を肯定している点はさておき、我が弟ながらなかなかふるってると思っていたら、発言の瞬間、笑うでも咎めるでも無い、何とも言えない沈黙が流れた。しかしそれはほんの一瞬で、すぐ笑顔で歓談が再開された。弟は何らかの社会運動に加わっている訳ではない、働いて家族を養っている「普通」の男性で、友人達も概ねそんな感じだ。あの一瞬の気まずさは、そんな人達の、元号についての、ひいては天皇へのある種の気分を表していたのではないかと思う。

明仁の「おことば」から始まった代替わり情勢の中、私たち天皇制いらないデモ実行委員会は首都圏の友人たちとともに、天皇制廃止を求めて様々なかたちで運動に取り組んできた。その中で、数多くの課題を抱える天皇制のうち、間口が広くより広範にと考え、元号の問題についてもこの度取り組む事にした。とは言え、元号につき軽く考えているというのでは決してない。

そもそも元号は中国が発祥であり、紀元前一四〇年に漢の武帝が「建元」と制定したのが始まりとされる。皇帝は、領土や人、物だけでなく、時間をも支配するという思想のもと発明された。中国文化の影響を受けた古代日本でも、六四五年に「大化」を使用。以降、日本書紀では散見されているが、現在のものは律令国家が成立した七〇一年の「大宝」からの継続だ。歴史上、天皇の権威が後退した時期があるにしろ「王が時間を支配する」という思想は連綿と続いているし、一世一元となった明治以降はそれが更に強化されたと考えるべきだろう。世界は、時間は、そこで生きる人それぞれのもの、と考える者にとっては邪魔でしかない。

アジア太平洋戦争での敗戦の後も元号は生きながらえ、血塗られた「昭和」がそのまま継続したのは言うまでもない。裕仁死去に伴って全国に広がった元号拒否のたたかいは、一九八五年の「日の丸・君が代」についての文部省調査と事実上の強要通知に対する反対闘争と共に、主に学校や自治体などの現場で展開されたと聞く。戦争の記憶が生々しかった頃から、侵略と殺戮のシンボルとして反対されている。

残念ながら、天皇制が廃止されていない現在、元号が持つそれらの問題は解決されていない。一方、単純に「不便」という理由も含めて、インターネットでは元号不要論が公然と語られだしている。先日は、選挙の不在者投票での宣誓書に西暦で記入している画像がアップされていた。二〇一七年にＮＨＫが行なった世論調査によると「西暦よりも元号をつかう」と回答した人は二八％に過ぎず、六八％が「元号よりも西暦をつかう」と回答している。改元のたびに暦がリセットされる不便さを多くの人が感じ、元号は生活から急速に後景化している。それでも、役所や学校などでは慣例化、事実上強制され続けている。

私が実家で経験した沈黙で感じたのと似た感じを、この国に住む多くの人が経験していると思う。その経験が天皇制に対する更なる沈黙を生み、その沈黙が天皇制を強化していく。反天皇制の強い意志をもって沈黙を破る事が出来る人も居るが、そうはいかない事もある。そこで（必ずしも「そこで」と言う訳ではないが）、署名運動なのだ。やった人はご存知と思うが、署名運動とはある意味、署名を求める時に発生する会話が眼目な所がある。元号への反対署名をきっかけに、天皇制を強化する沈黙を破る、一歩目の会話が生まれるかも知れない。足元からの反天皇制運動に活用して貰えたら大変嬉しいし、多く集まったら勿論嬉しい。新元号の発表は今年末とも報じられている。時間は余り無い。署名の第一次集約は四月三〇日。

次の元号は「屁、すな」ではなく、元号そのものを廃止にしよう！

太田昌国の夢は夜ひらく94

みたび

戦争を放棄したのだから死刑も……という戦後初期の雰囲気

死刑廃止のためには、犯罪に対する刑罰のあり方、死刑という制度が人類社会でどんな役割を果たしてきたのか、国家による「合法的な殺人」が人びとの在り方にどう影響してきたのか、犠牲者遺族の癒しや処罰感情をどう考えるか――など多面的な角度からの検討が必要だ。死刑に関わっての世界各地における経験と実情に学び、日本の現実に舞い戻るという往還作業を行なうえで、二時間程度の時間幅で、それぞれの社会的・文化的な背景も描きながら「犯罪と刑罰」を扱う映画をまとめて上映すれば、大いに参考になるだろう――そう考えて始めた死刑映画週間も、今年で七回目を迎えた。死刑廃止の目標が達成されたならやめればよい、将来的には消えてなくなるべき活動だと思うから、持続性は誇ることではない。だが残念ながら、情勢的にはまだ、やめる条件は整っていないようだ。

七年間で五六本の映画を上映してきた。思いがけない出会いが、ときどき、ある。外国の映画を観れば、映画とは、それぞれの文化・社会の扉を開く重要な表現媒体だということがわかる。韓国映画が、死刑をテーマにしながら奇想天外なファンタジーにしてしまったり、あからさまなお涙頂戴の作品に仕上げたりするのを見ると、ある意味「自由闊達な」その精神の在り方に感心する。加えて、軍事政権時代の死刑判決と執行の多さに胸が塞がれた世代としては、制度的には存続しつつも執行がなされぬ歳月が二〇年も続いているというかの国の在り方に心惹かれる。社会が前向きに、確実に変化するという手応えのない社会に（それは自らの責任でもあると痛感しつつも）生きている身としては。

日本映画、とりわけ一九五〇年代から六〇年代にかけての、映画の「黄金時代」の作品に触れると、冤罪事件の多かった時代だから、それがテーマの映画だと驚き呆れ、憤怒がこみ上げてくると同時に、骨太な物語構成・俳優陣の達者さと厚み、そして何よりも高度経済成長以前の街のたたずまいや人びとの生活のつましさに打たれる。深作欣二監督の『軍旗はためく下に』（一九七二年）には驚いた。私も、周囲の映画好きですらもが、未見だった。敵前逃亡ゆえに戦地で処刑された軍人の妻が遺族年金を受給できないという事実から、軍人恩給制度・戦没者追悼式・天皇の戦争責任・帝国軍隊を支配した上意下達的な秩序と戦犯級の軍人の安穏とした戦後の生活ぶり――などの戦後史の重要項目に孕まれる問題点が、スクリーン上で語られ、描かれてゆく。一九六〇年前後の深沢七郎による天皇制に関わる複数の作品（創作とエッセイ）もそうだが、表現者がタブーをつくらずに、自由かつ大胆に己が思うところを表現する時代はあったのだ。

今年の上映作品では『白と黒』（堀川弘通監督、橋本忍脚本、一九六三年）が面白かった。妻を殺害された死刑廃止論者の弁護士が、被告とされた者の弁護を引き受けるという仕掛けを軸に展開する、重層的な物語の構造が見事だった。証拠なき、自白のみに依拠する捜査が綻びを見せる過程もサスペンスに満ちていて、映画としての面白さが堪能できる。

死刑反対の弁護士の妻が殺された事件は実際にあったと教えられて、調べてみた。一九五六年、磯部常治弁護士の妻と娘が強盗に殺害された事件が確かにあった。明らかな冤罪事件である帝銀事件の平沢貞通被告の弁護団長も務めた人だ。事件直後にも氏は、「犯人が過去を反省して誤りを生かすこと」が真の裁判だと語り、心から済まぬと反省して、依頼されるなら弁護するとすら言った。氏は、五六年三月に参議院に提出された死刑廃止法案の公聴会へ公述人として出ている。曰く「自分の事件についていえば、犯人は悪い。だが、あの行為をなさねば生きてはいけぬという犯人を作り上げたのは何か。一〇年前、彼が一七、八歳のころ日本が戦争をして、彼に殺すことを一生懸命に教育し、ほんとうに生きる道を教育しなかったことに過ちがある」。この言葉は、作家・加賀乙彦氏が語ってくれる「新憲法で軍隊保持と戦争を放棄した以上、人殺しとしての死刑を廃止しようという気運が戦後初期には漲っていた」という証言と呼応し合っている。残念ながら法案は廃案になったが、その経緯を詳説している『年報・死刑廃止2003』（インパクト出版会）を読むと、時代状況の中でのこの法案のリアリティが実感できる。諦めることなく、「時を掴む」機会をうかがうのだ、と改めて思った。（三月三日記）

マスコミじかけの天皇制 20

〈世襲の超特権的奴隷制〉一族の娘の結婚トラブルをめぐって

――〈壊憲天皇明仁〉その18

天野恵一

二月十一日は、例年通り「反紀元節」行動の日であった。今年は、明治国家をつくった「長州」の政治エリートたちにつらなる自分が主導したいと明言している安倍首相（政権）がしかけている明治一五〇年式典（キャンペーン）反対をかかげた集まり。もちろん平成「代替り」の政治プロセスの渦中であることを十分に意識しつつの行動である。

その日は、やはり例年通りというわけにはいかなかった。「実行委」の宣伝カーとして準備されていた立川自衛隊監視テント村の車が、天皇主義右翼によって、包囲され、駐車場からうごかせなくなっているとの連絡が朝入り、宣伝カー不在のままのデモとあいなったのだ。集会後のデモは、参加者の荷物を見ている人物が必要となり、病身の私に、その役があてられ、ついでにデモには不参加。

例年より集まりがよかったデモは、力強く貫徹され、右翼のデモへの暴力的介入は、覚悟していたわりにはそれほどでもなく、警察側のデモ規制の乱暴さの方が、めだった（そう後で報告をうけた）。

私たちの〈思想・表現の自由〉の権利は、かくのごとく蹂躙され続けている。

人権蹂躙といえば、この間の「秋篠宮家」長女「眞子さま」婚約（延期）大騒ぎ報道に露出しているのはマス・メディア全体の中での〈人権感覚〉の消滅という恐ろしい事態ではないか。二月六日に「結婚」は天皇「代替わり」の終わる二〇二〇年に延期。そうマコ自身の「二人のお気持ち」なるメッセージとともに発表された前後のメディア大騒ぎのことである。婚約発表直後は全マスコミあげての民間の貧しいながらも美しき「王子」様と、ひたすらなるヨイショの対象であった「王子さま」は、今、一転し貧困にあえぐ、身分もわきまえず本当の「王子」になろうとした、詐欺師の母を持った青年として、バッシングを受けている（婚約者だった男に四百万借りたまま〈?〉という、どこにでもある話の持ち主である母親へのバッシングも、またものすごい）。

ここで注目私たちがすべきは、「〈マコ〉さま」なる女性への人権蹂躙のものすごさでもある。それは、まるで人間ではないような扱いではないか。

最新の週刊誌情報を紹介する。それは、こう書き出されている。

「目下、若いお二人は言い知れない試練に直面している。二月六日に宮内庁が発表した『再来年に延期』とは、少なくとも〝無期限凍結〟、実際には、〝なかったことにするための準備期間〟を意味するのは明らかである」。タイトルは「『小室圭くん』を『眞子さま』に背伸びさせた『ICU』の高すぎる学費」（『週刊新潮』3／8号）。身分をわきまえぬ「背伸び」が原因、マコが説得され、おさまれば「なかったこと」になるのだろうという、グロテスクな予測記事である。どれもこれも同じような、こうした大量の記事を読んでいると、「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立」という憲法二四条など、まるで存在しない戦後社会に生きているというような錯覚におそわれる。「戸主の同意」なしでは「家族の婚姻」はありえないとする、旧憲法〈旧民法〉下に、私たちは生きているわけではあるまいに。マスコミには、婚約は天皇に一度「裁可」された、重大な決定がくつがえされた前例なき事態といった、とんでもない主張も飛び交っている。それは問題だらけの「皇室典範」からだって、戦後は削除されている、天皇の裁可が必要という思想〈ルール〉が生きのびているかのごとき主張である。マコの「お気持」など、まったく無視なのだ。結局、世襲身分制の〈象徴君主〉一族の存在が、こういう事態を引きおこす元凶なのだ。

忘れてはいけないのは、自民党改憲草案の二四条は、婚姻について、「両性の合意のみ」から「のみ」を削除するものである点だ。今、現出しているのは、二四条についても安倍改憲の先取りという状況である。〈天皇条項〉を内包した「人権憲法」の必然的破綻の上に、明文改憲という政治コースが、この〈代替り〉状況の中で進行しているのである。

一連の人権蹂躙あたりまえ報道の中に、結婚によってマコが手にする一時金は「一億四千万」ぐらいだという話もあった。「品位」の代金なのだという。

〈世襲の超特権的奴隷制〉は、本当に気の毒この上なく、グロテスクだ。そう思いませんか？

一野次馬日誌

2月1日～2月28日

【2月1日】

美智子◆東京都中央区の日本橋三越本店を訪れ、知的障害がある生徒らが作った工芸品を展示、販売する「旭出学園工芸展」を鑑賞し、豆皿やタイルの壁掛けなどを購入。旭出学園は練馬区にある特別支援学校で、明仁、美智子が皇太子夫妻時代の1977年に同学園を視察し、2年に1回開かれる工芸展に、美智子はほぼ毎回訪れていると報道。

久子、承子、絢子◆宮内庁が、故高円宮の妻久子が1月31日付で日本スカッシュ協会と日本海洋少年団連盟の名誉総裁を退任し、1日付で長女承子がスカッシュ協会、三女絢子が海洋少年団連盟の名誉総裁にそれぞれ就任した、と発表。

東宮女官◆森川真理子が東宮女官に就任する宮内庁人事が公表される。

【2月2日】

皇位継承◆菅義偉・官房長官が記者会見で、明仁の退位や新天皇の即位儀式などを巡る政府の準備委員会が、皇室の歴史や伝統に詳しい有識者から意見を聴取していると明らかに。有識者の具体名について「静かな環境で進めたい」として、準備委員会で聴取内容の報告を受けた後に公表する考えを示す。退位に関し「憲政史上初めての事柄だ。国民の祝福の中でつつがなく行えるよう万全の準備を進める」。

【2月5日】

陸自ヘリ墜落◆佐賀県神埼市千代田町の住宅に、陸上自衛隊目達原駐屯地（同県吉野ケ里町）所属の2人乗りAH64D戦闘ヘリコプターが整備点検後の試験飛行中に墜落、炎上。

名護市長選◆安倍晋三首相が、沖縄県の米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設の是非が争点となった名護市長選で与党などが推薦する新人渡具知武豊が、移設反対派の現職を破ったことを受け、移設を推進する意向を表明。

【2月6日】

眞子◆宮内庁が、婚約が内定している眞子と国際基督教大時代の同級生で法律事務所勤務の小室圭について、11月4日に予定していた結婚式など関連する一連の儀式を2020年まで延期すると発表。眞子が、宮内庁を通じ「十分な準備を行う時間的余裕がないことを認識するようになりました」とする2人の「お気持ち」を文書で示す。小室について、親族に金銭トラブルがあるとの一部報道があったが、宮内庁は「週刊誌の報道があったからというわけではない」と、延期との関連を否定したと報道。

日米共同訓練◆陸上自衛隊と米海兵隊が、米カリフォルニア州で日米共同訓練を行い、敵に奪われた離島を奪還する様子を公開。

【2月7日】

明仁、美智子◆ドイツのシュタインマイヤー大統領夫妻を皇居・御所に招き懇談。宮内庁によると、明仁が、皇太子時代の1953年、欧州訪問時に当時の西ドイツに立ち寄ったことに触れ「（戦後の日本と比較して）ドイツでは、街並みがまだ残っているところもあり、戦災の傷痕を日本ほど強く感じられなかったことが印象的でした」などと述べたというと報道。

秋篠宮、紀子◆東京・上野の日本学士院を訪れ、「日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞」の授賞式に出席。

眞子結婚延期◆菅義偉・官房長官が記者会見で、眞子と小室圭の結婚延期について「政府としては今後を静かに見守りたい」。「宮内庁からはお二方が話し合いを重ね、関係の皆さんにご相談されて出したご判断だと聞いている」。

【2月8日】

眞子結婚延期◆宮内庁の山本信一郎長官が定例記者会見で、眞子と大学時代の同級生の小室圭との結婚延期について「あくまでも延期で、結婚の意思に変わりはないと伺っている。2人のお気持ちを理解し、静かに温かく見守ってほしい」。眞子が2人の「お気持ち」として記し公表した文書について「つづられたお気持ちをそのまま受け止めてほしい」。小室の親族に金銭トラブルがあるなどとする週刊誌報道について「申し上げる立場でないし、中身を知る立場でもない」。政府が、眞子が皇室を離れる際の一時金として、2018年度予算案に計上している1億5千万円について「必要なければ支出されないものなので、項目の削除は考えていない」。

皇室典範◆政府が、天皇と皇太子、皇太孫の成年を18歳とした皇室典範の条文を維持する方向で調整していることが、関係者への取材で分かる。成人年齢を18歳に引き下げる民法「改正」に合わせて削除する方針だったが、与党から異論が出たためで、政府は当国会に民法や皇室典範を含む関連法など計25法の「改正」案を提出する予定と報道。法務省が「改正」案を与党側に説明。自民党法務部会の出席者によると、このうち皇室典範について議員から「皇室典範が政局に巻き込まれるのはよくない」「慎重にすべきだ」などの意見が相次いだという。

【2月9日】

眞子◆東京・銀座のセントラルミュージアム銀座で開催中の「現代女流書100人展」を鑑賞。結婚延期発表後、初めての「公務」に臨んだと報道。

「旭日旗」◆平昌冬季五輪の選手村でフリースタイルスキー男子モーグルの西伸幸選手＝マンマーノフーズ＝が「旭日旗」を連想させるデザインの帽子を着用していたことを明らかにし、謝罪。

2・11◆安倍晋三首相が、「建国記念の日」を11日に迎えるに当たり「伝統を守りながら、困難な課題にも果敢に挑み、より良い未来を切り開く。私はその決意を新たにしている」とのメッセージを発表。

米オスプレイ◆沖縄県うるま市の伊計島の海岸に、米海兵隊普天間飛行場（宜野

湾市）に所属する輸送機オスプレイの重さ約13キロの部品が流れ着いているのが見つかる。

【2月10日】

代替わり◆天皇代替わりに伴う行事について「宗教的な側面があり、国の宗教への関与を禁じた憲法に違反するのではないか」と考える市民団体が、小冊子「即位・大嘗祭Q＆A 天皇代替わりってなに？」を作成したと報道。

強制不妊手術◆旧優生保護法を巡る共同通信の調査で、障害などを理由に人工妊娠中絶を施された個人名記載の資料が千葉、広島の両県に13人分現存していることが分かる。

【2月11日】

「明治の日」◆自民党有志議員が、11月3日の「文化の日」が明治天皇誕生日に当たるとして、祝日法を「改正」し「明治の日」に改めることを目指す議員連盟を3月にも発足させ、古屋圭司・衆院議院運営委員長が会長に就任する方向で調整していることが分かる。

2・11◆「建国記念の日」で、憲法「改正」に反対、賛成それぞれの団体が東京都内で集会を開いたと報道。歴史教育者らでつくる団体が中央区で開いた集会に、約260人（主催者発表）が参加。神社本庁などでつくる「日本の建国を祝う会」が渋谷区で開いた式典に主催者発表で約1200人が参加。

【2月13日】

紀子◆広島市中区で開かれた結核予防全国大会に出席。

小和田恒◆オランダ・ハーグにある国際司法裁判所（ICJ）裁判官の小和田恒が安倍晋三首相を官邸に訪ね、ICJ所長に辞表を提出したと伝える。高齢であることに加え、2019年5月に徳仁が新天皇に即位するのに伴って長女の雅子が新皇后になることも考慮したと報道。

森友学園◆政府、与党が衆院予算委員会などで、学校法人「森友学園」への国有地売却問題を巡り、野党が求める佐川宣寿・国税庁長官の国会招致を拒否。

【2月14日】

明仁、美智子◆東京・銀座の歌舞伎座を訪れ、二代目松本白鸚、十代目松本幸四郎、八代目市川染五郎の親子3代襲名披露の歌舞伎公演を鑑賞。

明仁退位◆政府が、明仁の退位の儀式について、内閣の助言と承認を必要とする憲法上の国事行為とすることを3月に閣議決定する方針を固めたと、政府筋が明らかに。皇室典範に定めがなく、関連儀式について、どんな根拠で実施するか明確化しておく必要があると判断したと報道。

徳仁、雅子◆東京都港区のサントリーホールで、ラトビア出身の世界的バイオリン奏者ギドン・クレーメルらによるコンサートを鑑賞。鑑賞後、コンサート関係者と懇談。

ミサイル対応◆文部科学省が、北朝鮮による相次ぐ弾道ミサイル発射を受け、全国の学校が危機管理マニュアルを作る際に指針となる手引書の改定案を発表。

【2月15日】

明仁在位30年式典◆政府が、明仁の在位30年を祝う記念式典を2019年2月に東京・隼町の国立劇場で実施する方向で調整に入り、皇室行事などの関係で24日が有力となっていると報道。明仁、美智子が臨席するほか、首相や衆参両院議長ら三権の長も出席する見通し。

代替わり◆菅義偉・官房長官が、全国カレンダー出版協同組合連合会の幹部と首相官邸で会い、明仁の退位後に徳仁が新天皇に即位する2019年5月1日の祝日などの扱いを早急に決めるよう要請を受ける。

【2月16日】

美智子◆東京都世田谷区にある医療施設「もみじの家」を訪問。施設関係者と懇談。

秋篠宮、紀子、眞子◆東京・有楽町の映画館「ヒューマントラストシネマ有楽町」で、東日本大震災後の被災地を舞台にしたドキュメンタリー映画を鑑賞。出演者らと懇談。

新元号◆2019年5月1日の新天皇即位に伴う新元号の公表時期を巡り、政府内で当年後半以降とする案が浮上していることが分かる。早期公表で新天皇への注目が集まれば、天皇との「二重権威」が生じかねないとの懸念が背景にあるとして、5月1日の改元までの期間を極力短縮する方が望ましいとの声が強まっており、翌年の公表も選択肢になるとみられると報道。政府筋が明らかに。

【2月19日】

明仁、美智子◆静養のためとして、神奈川県葉山町の葉山御用邸入りし、「小磯の鼻」と呼ばれる御用邸近くの海岸を散策。明仁が報道陣から、平昌冬季五輪での日本選手の活躍について問われ「良い成績を取って良かったですね」。

代替わり◆政府が、2019年4月30日の明仁の退位と翌5月1日の徳仁の新天皇即位を巡り、菅義偉・官房長官をトップとする準備委員会の第2回会合を20日午前に首相官邸で開くと発表。

昭和天皇独白録◆昭和天皇が太平洋戦争前や戦中の出来事を回想した「昭和天皇独白録」を、米ニューヨークの競売で落札した美容外科「高須クリニック」の高須克弥院長が、宮内庁に原本を届けた。

【2月20日】

代替わり◆政府が、2019年4月30日の明仁の退位と翌5月1日の徳仁の新天皇即位を巡り、菅義偉・官房長官をトップとする準備委員会の第2回会合を首相官邸で開く。退位の儀式を「退位の礼」とし、具体的な式典の名称を「退位礼正殿の儀（仮称）」と決定。「国事行為」と位置付け、退位特例法に基づき退位する明仁に、首相が「国民」の代表として感謝の意を伝達し、明仁が「国民」に最後の「お言葉」を述べる段取りとする。参列者数を絞り込んで「簡素化」し、「お言葉」は、天皇の政治関与を禁じた憲法に触れないよう配慮したと報道。

【2月21日】

日の君処分◆東京都教育委員会が、都立高校の卒業式で君が代斉唱時に起立しなかったとしていったん減給処分とした教員2人について、改めて戒告処分とした

と発表。減給処分は東京地裁が前年9月の判決で「裁量権を逸脱している」と取り消し、判決が確定したためで、都教委は「判決を踏まえて処分を検討した結果」としていると報道。

【2月22日】

明仁、美智子◆「静養」のため滞在していた葉山御用邸から帰京。

改憲◆安倍晋三首相が衆院予算委員会で、憲法9条の2項を維持したまま自衛隊の存在を明記する自身の改憲提案に関し、自衛隊違憲論を取り払う目的があるとの認識を重ねて示す。

【2月23日】

天皇、皇族◆58歳の誕生日を迎えたとして徳仁が皇居・御所を訪れ、明仁、美智子にあいさつ。東宮御所に戻り、雅子と共に、秋篠宮、紀子をはじめとした皇族から祝賀を受ける。東宮御所を訪れた宮内庁の山本信一郎長官ら幹部から「お祝い」のあいさつを受ける。夜、明仁、美智子と秋篠宮一家らが東宮御所を訪れ、共に夕食。

徳仁◆58歳の誕生日を迎えたとして、これに先立ち宮内記者会と会見し、翌年5月1日の即位が決まったことを受け「自己の研さんに励む」と述べ、新時代の象徴天皇の在り方について「社会の変化に応じて公務に対する要請も変わってくる。新しい要請に応えていくことは大切。そうした公務に真摯に取り組んでまいりたい」と離したと報道。／宮内庁東宮職が、1月31日夜に徳仁が自ら撮影した皆既月食の写真と、後日、それを見ながら談笑する一家の写真を公開。／3月16～22日、第8回世界水フォーラムへの出席などのためブラジルを訪問することが、閣議で了承される。宮内庁は「私的な旅行」と位置付けていると報道。

古墳調査◆宮内庁が第2代綏靖天皇陵として管理する奈良県橿原市の古墳とみられている小山で、考古学や歴史学などの研究者16人が立ち入り調査。これまで発掘調査されておらず古墳かどうか判然としていなかったが、陵墓の周囲を観察し、盛り土の形状から古墳と認定したと報道。

「慰安婦」問題◆国連の女性差別撤廃委員会の会合がジュネーブで開かれ、韓国の鄭鉉栢・女性家族相が旧日本軍の「従軍慰安婦」問題について、日本政府が使用しないよう求めている「性奴隷」の言葉を用いて説明を行う。

朝鮮総連銃撃◆東京都千代田区富士見の朝鮮総連中央本部の門の前で、男性2人が拳銃を建物に向け数発を発砲し、門扉を壊す。

【2月24日】

防衛政策◆小野寺五典・防衛相が、年末までに見直す防衛力整備の指針「防衛計画の大綱」や、2019年度以降の次期中期防衛整備計画の策定に関連し、戦闘機の配備充実を検討する考えを示す。

【2月25日】

マラソン警備◆警視庁が2020年の東京五輪・パラリンピックに向けた警備の試金石と位置づけ、主催する東京マラソン財団と協力し、民間の警備員と合わせて2万人規模で警備にあたる。

【2月26日】

明仁◆皇居・御所で、訪日していた南米チリのバチェレ大統領と懇談。宮内庁によると、2007年の訪日で広島市を、今回は長崎県を訪れたという大統領が「全ての国々が核廃絶のために努力する必要がある」と語ると、明仁は言葉を発することはなかったが、うなずくようにして聞いていたというと報道。大統領が、今回の滞在で広島、長崎以外の場所も先の大戦で大きな被害に遭ったことを知ったと述べると、明仁は皇居や赤坂御用地周辺も焼け野原だったことを説明し「ただし通常兵器に比べて、核兵器の場合、放射能の影響が後々まで残るという根本的な違いがあります」と応じたという。

【2月27日】

代替わり◆政府が、明仁の退位や新天皇即位の儀式を巡る準備委員会が20日に開いた会合の議事概要を首相官邸ホームページで公表。即位の礼から大嘗祭までの儀式に関し、日程にゆとりを持たせ、簡素化も検討すべきだとの意見が出たと報道。

「内奏」・閣僚認証式◆安倍晋三首相が、皇居で「内奏」、福井照・自民党衆院議員の沖縄北方担当相就任に伴う閣僚認証式に出席。

【2月28日】

靖国神社宮司◆靖国神社が、徳川康久宮司が退任し、後任に元伊勢神宮禰宜の小堀邦夫が3月1日付で就任すると発表。

集会の「眞相」

キリスト教と天皇制に通底する家族主義との対峙を！

ターゲット・イヤー2020に向かい、改憲・戦争準備の仕上げが迫る今年、二月恒例の「日の丸・君が代」の強制をはね返す神奈川集会とデモは、「国旗・国歌の意義の理解とそれらを尊重する心情と態度の厳粛で清新な雰囲気の中での育成」へと踏み込んだ県教委の人権侵害を追及する交渉や全県下へ戦争煽る「弾道ミサイル落下時訓練」指示の撤回を要求する県庁包囲行動直後の二月三日に行われた。

天皇退位特例法・天皇代替わり準備でいよいよ開き直ってきた「天皇制」について、今年の話し手のなか伝導所牧師堀江有里さんは、「それを支えるのはだれか」と問題提起した。九〇年代初頭から起こされた同性愛者の人権裁判に関わり、京都でECQAを立ち上げ、神奈川に来て一年の堀江さんは、キリスト教の「異性愛主義」の解読を経て、「つがい主義」「家族主義（つがい＋こども）」批判に辿り着き、「家族の多様性の容認」で事足れり

とする性差別反対主義や同性婚容認で自治体が追いついたようなLGBTブームに違和感を覚えるという。より豊かな国づくり――経済力や兵力の増強――が目指される中、「基礎的な単位」として相互扶助の役割を担わされる「家族」のあり方に同性カップルも利用価値ありとして包摂される危険性があるからだ。「家族」をもって「愛のユニット」と認知する婚姻制度こそ問われるべきで、そんな平和な愛の象徴「正しい家族」を天皇・皇后に演じさせ、「国家＝天皇家を宗家とする一大家族」とみなし、「天皇＝家父長・臣民＝子」という血縁関係になぞらえる「家族国家観」は異性愛に基づく社会秩序の形成、国民統合・管理のイデオロギーで、キリスト教との親和性も高いのだという。「そんな矛盾の中で葛藤・逡巡しながら、家族主義や家族福祉政策を批判し、そこへの包摂に加担するキリスト教と天皇制双方に対峙する」というスタンス表明は貴重なメッセージだった。

（神奈川の会／大友深雪）

「代替わり」と近代天皇制一五〇年を問う！ 反「紀元節」2・11行動

二月一一日、今年も反「紀元節」の行動として、「代替わり」と近代天皇制一五〇年を問う！反「紀元節」2・11行動を無事終えることができた。例年どおり反天連も実行委に参加した。集会は太田昌国さんを講師に全水道会館で開催。参加者は一九〇人を越え、会場からあふれた人は廊下に座るという状態で、大盛会となった。

太田さんからは冒頭、歴史のとらえ方について言及され、歴史がつくられる過程においてはつねに対抗関係があったこと、その対抗関係の結果が現在に繋がるものとしてあるが、その過程を包括的に読んでいくことの大事さを語られた。そして、「明治一五〇年」を安倍たちが持ち上げることの問題もそういった観点から話を進められた。

印象に残るのは、「明治維新」におけるイデオローグ的英雄・吉田松陰が遺した、『幽囚録』（一八五四）の紹介から始まる話だ。この時点で松陰は、「カムチャツカ、オホーツク、琉球、朝鮮、満州、台湾、ルソン諸島」を「収め、進取の勢を漸示すべし」と説き、長くない近代化の歴史の過程でその説に沿った形で侵略・占領・植民地化を進めてきた日本の近代史＝明治一五〇年＝近代天皇制について語られたことだ。その延長にある「明治一五〇年」キャンペーン批判として、多くの人たちと一緒に学んでいきたい視点であった。後日発行予定の報告集に講演要旨を掲載予定。ご参照ください。

デモは2・11当日、宣伝カーが右翼の妨害で出せない状況となり、実行委は対策に奔走。デモ終了まではいろいろと緊張させられたが、右翼との衝突もなんとかひどい状況とはならず、無事成功裡に終わった。デモ参加者も一九〇名ほど。人の力は大きいのだ。

デモでは、「天皇神話に基づく建国記念の日反対」「明治は帝国主義の始まりだ」「植民地主義の歴史を賛美するな」「新しい天皇はいらない」「元号反対」「天皇は沖縄・与那国に行くな」「天皇制国家の沖縄切り捨て、基地押しつけを忘れるな」等々、大きく声を上げて歩いた。いい集会とデモでした。また一緒に歩こう！

（実行委／大子）

憲法不在の天皇「生前退位」と、その天皇の行為に対する「国民」の圧倒的共感―私たちは、これらとどう向き合うのか。

「主権」は天皇にあるのか、在民なのか。「天皇あっての、この国」。マスコミは、今も存在する「菊のタブー」をしっかりと守り、こぞって「護憲？」天皇アキヒトの「生前退位」を容認、そのアキヒトが考える「象徴天皇制」を称賛した。マスコミは意図的に「憲法」を不問にし、「自由党」を除く政党は「天皇翼賛会」化を顕わにした。

第39回「紀元節（建国記念の日）」を考える2・11京都集会は、二月一一日、京都市内の日本キリスト教団・洛陽教会で「憲法不在の天皇「生前退位」？天皇代替わりで、問われる主権在民？」をテーマに、九州大学名誉教授の横田耕一さんを講師におこなった。主催は、京都「天皇制を問う」講座実行委員会と日本キリスト教団京都教区「教会と社会」特設委員会、反戦・反貧困・反差別共同行動in京都の三団体。これまで2・11集会は、二八年前の「Xデー」を闘うために組織した「天皇制の強化を許さない京都実行委員会」で「『日の丸・君が代』とたたかう2・11京都集会」として取り組んできたが、護憲と地域主義色に足をすくわれ、全国各地で闘われる取り組みと、ますます疎遠になり、さらに「来るべきXデー」の取り組みを考慮し、二年前の私自身の六五歳定年を機に、原点の京都「天皇制を問う」講座実行委員会を軸にした現在の三団体による取り組みに再編し、「来るべきXデー」の備えにした。しかし、天皇アキヒト自身による「生前退位」メッセージは、全くの想定外だった。「この代替わり」とどう向き合うのか。どう闘うのか。

集会は、他の集会と重なり六〇人の参加者となったが、講演に集中し、さらに活発な質疑応答となった。横田さんは、憲法における天皇の地位・権能・根拠、憲法と皇室典範との関係を丁寧に説明し、天皇メッセージと「生前退位」の問題点を明らかにした。とりわけ天皇の意思でやっている「象徴としての公的行為」を厳しく批判。そして、何よりも、「生前退位」が明らかにしたものは、「国民」が、憲法上の天皇の地位・根拠・権能にたいする無関心と、天皇の行為に対する圧倒的な共感、さらにリベラル派や左翼政党の天皇観の変化を上げ、天皇はもとより、これら「国民」とどう向き合うのか、を提起した。

（京都「天皇制を問う」講座実行委員会／寺田道男）

国体って何？ オリンピックって必要？

茨城を拠点に活動するわたしたち戦時下の現在を考える講座では、毎年二月一一日の前後に地元で反戦・反天皇制・反ナショナリズムの集会を企画している。今年は二月一二日に「国体って何？ オリンピックって必要？ 2019茨城国体とナショナリズムを問う」と題して、オリンピック災害おことわり連絡会の宮崎俊郎さんの講演と参加者による討論からなる集会をつくば市内で行った。平昌オリンピック現地での抗議行動を終えて前日戻られたばかりの宮崎さんのお話は、韓国で平昌オリンピック反対運動を展開しているのは主に北朝鮮との合同チームに反対する右派である点、それゆえ日本から韓国に行って平昌五輪に反対する自身が右派と勘違いされないように気を遣ったことなどから始まった。そして、幻の一九四〇年、一九六四年、来る二〇二〇年のすべての東京五輪は復興五輪であり、特に、戦争体制へと向かい五輪開催を返上することとなった一九四〇年と目下の二〇二〇年の類似性が指摘された。続いて宮崎さんは、「オリンピックがスポーツをダメにするのか？ スポーツがそもそもダメなのか？」と問いつつ、スポーツとナショナリズムの関係を分析するいくつかの視点を提示した。お話の最後に、オリンピック・パラリンピック教育に子どもたちが動員され、オリンピックを利用した「国民監視」が強化されることが批判され、東京五輪返上運動への参加が呼びかけられた。その後の討論においては、様々な視点からの五輪批判、近代スポーツ批判の意見が参加者から出された。主催からは、東京五輪に先立つ二〇一九年の天皇代替わり後に予定されている最初の国民体育大会すなわち茨城国体に注視していただきたく説明を行わせてもらった。私たちの講座では、天皇代替わり、国体、五輪、そして改憲といった動きを一続きのものと捉え、今後も、各地の運動ともつながりながら地元での取り組みを地道に続けてゆくつもりである。

（戦時下の現在を考える講座／藤田康元）

反天日誌

2月3日（土）●「日の丸・君が代」の強制をはね返す2・3神奈川集会とデモ（集会の真相参照）

2月11日（日）●2・11反「紀元節」行動 明治150年＝近代天皇制を問う（集会の真相参照）

2月12日（月）●国体って何？オリンピックって必要？2019茨城国体とナショナリズムを問う（集会の真相参照）

2月22日（木）●原発被ばく労災損害賠償裁判第6回口頭弁論

14時～（13時よりアピール行動）／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

2月24日(土)●大軍拡と基地強化にNO！防衛省デモ＆集会

●人民新聞・オリオンの会への弾圧抗議集会

2月25日（日）●護岸工事・土砂投入で海を殺すな！辺野古新基地建設NO！2・25首都圏大行動

［学習会報告］

古川隆久『皇紀・万博・オリンピック――皇室ブランドと経済発展』（中公新書、一九九八年）

紀元二千六百年に向けて、万博やオリンピックといった国家規模のイベントがどのように発案され、実現出来ずに終わったのかを歴史学者が述べた本である。著者は、二千六百年はお題目に過ぎず、イベントを通して経済発展を目指すのか国民統合を目指すのかが対立する論点であり、国民は前者を、政府は後者を志向し、いわば同床異夢だった。戦前は暗い時代ではなく大量消費社会であってファシズムに塗り込められていたのではない、とする。

この主張が実証的に述べられているのならまだいい。語り口に芸があればそれなりに読めもしよう。しかし著者は事実を人脈に基づいて並べ立てるだけで論証らしいものもなく、記述も平坦、正直読み通すのが辛かった。それは僕一人ではなかったようで、僕の報告が終わるなりみんな口々にいかに読みづらい本だったかを語りだし、報告者に同情まで寄せられる始末。こんな本も珍しい。

今回の本はそもそも前回のケネス・ルオフの『紀元二千六百年』で先行研究に上げられていたところから拡大学習会でも取り上げられた。内容的にも重なる部分が多々あり、読んでいれば自然と比べてしまうのだが、読んでいて引き込まれるのも論証に同意や反論したくなるのも圧倒的に『紀元二千六百年』である。ケネス・ルオフは、日本人は忘れたつもりだろうが戦前、ファシズム下の消費社会を充分に楽しんでいた、との告発が根底にあった。古川隆久は、戦前の日本は経済的発展を遂げた社会で人々は消費を楽しみつつ、ファシズム下のイベントに、あくまでも動員として参加していた、と語る。そこに当時の状況への批判はない。皇室ブランドと言う言葉は頻出するが天皇制と言う言葉は出て来ないところにも著者の姿勢は表れている。

著者はこの本以降、天皇関係の本をいくつか出しているが、出来れば読まずに済ませたいところである。

（加藤匡通）

集会情報 INFORMATION

開催中～7月末予定●日本人「慰安婦」の沈黙
13時～18時（月・火・休日休館）／ＡＭ・女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅ほか）／連絡先：同館（03-3202-4633）

3月11日（日）●原発事故は終わっていない！再稼働反対、責任隠蔽の「皇族出席の追悼式典」・一斉黙祷反対！　3・11行動
デモ・13時30分：日比谷公園霞門集合（地下鉄霞ヶ関駅ほか）／集会・18時～：中央区京橋区民館1号室（地下鉄京橋ほか）／元原発労働者の講演／3・11行動実行委員会（fax.03-3446-9058）

●事故から7年　追悼と東電抗議
13時30分～／東京電力本店前／呼びかけ：経産省前テントひろば（070-6473-1947）ほか

●日本原電本店前抗議
15時30分～／日本原電本店前／呼びかけ：再稼働阻止全国ネットワーク＋3・11抗議集会茨城実行委員会（090-3961-8578ほか）

3月12日（月）●9条改憲阻止！朝鮮半島で戦争はさせない！　霞ヶ関デモ
18時～／日比谷公園霞門集合（地下鉄霞ヶ関駅ほか）／主催：戦争・治安・改憲ＮＯ！総行動実行委員会（03-3591-1301ほか）

3月14日（水）●警視庁機動隊沖縄派遣は違法　住民訴訟第6回口頭弁論
11時30分～（10時30分よりアピール行動）／東京地方裁判所（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

3月16日（水）●天皇の沖縄への「慰霊の旅」と与那国島訪問について考える集会
18時45分～／練馬区厚生文化会館（西武池袋線ほか練馬駅）／大仲尊／主催：アキヒト退位・ナルヒト退位問題を考える・練馬の会

●第3回靖国連続学習会「近代天皇制と宗教」
18時30分～／エル大阪６０６号（地下鉄天満橋駅ほか）／近藤俊太郎／主催：安倍首相靖国神社参拝違憲訴訟の会・関西（Fax: 06-7777-4925）

3月24日（土）●「辺野古の海に土砂を投入するな新宿デモ
14時～アピール・15時デモ出発／新宿アルタ前（ＪＲほか新宿駅）／主催：辺野古への基地建設を許さない実行委員会（090-3910-4140一坪反戦関東ブロック）

●天皇の沖縄・与那国訪問を問う集会
18時～／駒込地域文化創造館（ＪＲほか駒込駅）／大仲尊／主催：天皇「代替わり」と安保・沖縄を考える４・28―29行動（090-3438-0263）

3月25日（日）●三里塚管制塔占拠闘争40年　今こそ新たな世直しを！集会
11時～／連合会館２Ｆ（地下鉄新御茶ノ水駅ほか）／主催：三里塚芝山連合空港反対同盟（代表世話人柳川秀夫）元管制塔被告団（0479-78-8101ほか）

●「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第4回　明治１５０年式典・キャンペーンと「生前退位」
13時30分開場／ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅ほか）／太田昌国・伊藤晃・天野恵一／主催：ピープルズ・プラン研究所（03-6424-5748）

3月31日（土）●アンダーコントロール？復興？　3・11と「復興五輪」
13時15分開場／文京区民センター２Ａ／小出裕章・佐藤和良／主催：「２０２０オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5052-0270）

4月15日（日）●連続学習会・象徴天皇制を考える『天皇家の財布』を読む
14時～／つくば市立春日交流センター／主催：戦時下の現在を考える講座（090-8441-1457加藤）

4月28日（土）●明治１５０年：日本（ヤマト）による沖縄差別を問う
18時開場／文京区民センター３Ａ（地下鉄春日駅ほか）／湖南通／主催：天皇「代替わり」と安保・沖縄を考える４・28―29行動（090-3438-0263）

4月29日（日）●反「昭和の日」デモ
13時集合／柏木公園（予定・ＪＲ新宿駅ほか）／主催：天皇「代替わり」と安保・沖縄を考える４・28―29行動（090-3438-0263）

【カンパにお礼！】
年末カンパ、たくさんの方からお送りいただきました。ありがとうございました！
反天連事務局の老若男女はいま、それぞれの条件でなんとか踏ん張っています。このひどい天皇状況に風穴を開けるための活動に、今後ともご参加・ご協力をお願いします。ともに声を上げていこう！

……神田川

●久しぶりの超過密作業。こういう時にも例外なくいろいろトラブル発生。でも、できちゃうんから恐ろしい……。（木菟）
●痛くてもヘロヘロでも頑張っちゃう。偉いな～（鰐）
●月も変わって春の嵐が吹き荒れ、インフルあるいは風邪引きや、さらに痛いイタい風も訪れて（蝙蝠）
●病人ばかりの集団作業。なんとか終わりそう。ゴクロウさん（熊）
●トラブルの一つは私です。イタイ。同情するより、早めの原稿と迅速な作業を！（貘）